

独思録：「年のはじめ」(1/2)

今泉 蓮

元日を御目出（おめで）たいものときめたのは、一体何処（どこ）の誰か知らないが、世間がそれに雷同（らいどう）しているうちはテレビが喜ぶだけである。

新聞でもテレビでも、いやしくも元日の紙上や番組にあらわれる以上は、いくら元日らしく明るく振舞っても、元日からすぐに世の中が明るくなるはずがないのにきまっている。

もっとも師走しわすに想像を逞（たくま）しくしてはならぬと申し渡された次第でないから、節季（せつき）に正月らしいふりをして、年内に明るい記事や番組を作っておいといて、一夜明けるや否や雑煮（ぞうに）を頬張（ほおばる）る様に各家庭に配るに違いないが、御目出たい実景の乏しい今日、御目出たい想像などは容易に新聞社やテレビ局の頭に宿るものではない。それを無理に御目出たがろうとすると、所謂（いわゆる）太倉（たいそう）の粟（ぞく）陳々相依（ちんちんあいよ）るといふ頗（すこぶ）る目出度（めでたく）ない現象に腐化して仕舞（しま）う。

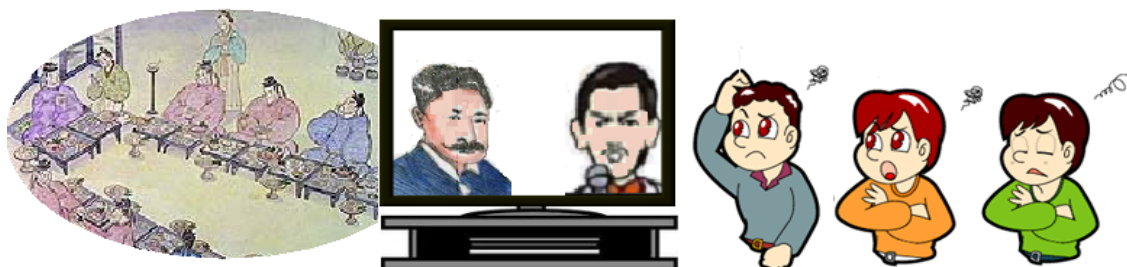
諸君子は已（やむ）を得ず年初にちなんで、政治の事を書いたり、経済の事を書いたりするが、これは寧（むし）ろ駄洒落（だじゃれ）を引き延ばした位のもので、要するに年末及び年始の実質とは痛痒相冒（つうようあいおか）す所なき閑事業である。

いくら初春だって、そんな無駄話で十頁（ページ）も二十頁も埋られ、また、一日中馬鹿な特番を見せられた日には、たまったものではない。元日の新聞やテレビは単に絢爛さにおいて各社ともに競争する訳になるのだから、其の出来不出来に対する具眼の審判者は、読者や視聴者のうちですることのないただの暇人（ひまじん）だけだろうと云われたって仕方がない。

政治家達は新聞やテレビの眼が在らぬ方へ向いているうちに、国民が里帰りしているうちにせっせと新年会を開き、国民不在の党内対立を年初から行っている。

これが普通の平日なら、国民の眼はもっと厳しいものになっていた訳だから、新聞やテレビももっと批判的になって新年会を有（あり）の儘（まま）に報道したかったのだろうが、如何（いかん）せん、報道する時は、三が日のお屠蘇気分が残っていたし、且（かつ）政治の話など読者や視聴者が関心をもつとも関心をもたないとも分らない上に、大雪の被害が出る事も全然未定だったので、已（やむ）を得ず極（きわ）めてあっさり報道されたのであろう。

今年ほうさぎ年。景気が上向く年だそう。政治も経済も自信を取り戻す年と願いたい。



<参照> 夏目漱石「元日」